

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 27

加古川流域と山背・但馬 —「山田寺亞式」軒丸瓦は語る—

寺 岡 洋

山背の「山田寺亞式」軒丸瓦

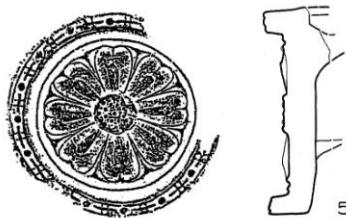
まず、「山田寺亞式」から。山田寺は蘇我倉山田石川麻呂が舒明13年（641）に建立を開始し、7世紀後半に完成したとされる寺院で、寺院跡が特別史跡公園（桜井市）として保存されている。2008年2月、むくげの会・奈良新春合宿の際に行ったのですが、大雪で公園へ入れませんでした。この山田寺創建の際に使用された瓦当（がとう）を「山田寺式」と呼んでいる（上図）。軒丸瓦は周縁（外側の突出した部分）に三重の圈線が巡り、花弁が単弁で、子葉があることが特徴といわれる。

この山田寺式軒丸瓦の文様をベースにし、デザインを変化させた軒丸瓦を「山田寺亞式」と呼称している。あまり見られない特異な文様で、平瓦の「ジグザグ縄叩き」同様、系譜を追いややすい。



■北白川廃寺系列の山田寺式軒丸瓦 山田寺亞式 — 秦氏のデザイン? —

この山田寺亞式の軒丸瓦は、北白川廃寺（京都市左京区）で使われ始めたので「北白川廃寺系列の山田寺式軒丸瓦」とも呼ばれ、これならば素性がはっきりするが、長くなるのが難点。北白川廃寺で出土する山田寺式軒丸瓦は2種類あり、A類は「原型式にきわめて近いと評価」され、実年代は670年代かと推定されている。今回取上げるB類（上図）は、「周縁に珠点と升（キ）形の文様を交互に配する山田寺亞式」と呼ばれるもので、B類はA類の文様を独自に変化させている〔菱田2005・堀2010〕。



A類は大規模な瓦積基壇をもつ金堂跡（東方基壇）周辺で出土し、塔跡からは殆ど出ないが、B類は塔基壇周辺のみ出土する。塔の建造は金堂より遅れ、さらに金堂との距離が80mも離れており、造営主体が異なるのかもしれない。

周縁に珠点（珠文）と升（キ）形を配する軒丸瓦は朝鮮半島でも類例がなく、北山背地域独自のデザインのようだ。ただ、周縁に珠点を巡らすものは統一新羅で多く見られ、あるいは関連するかもしれない。

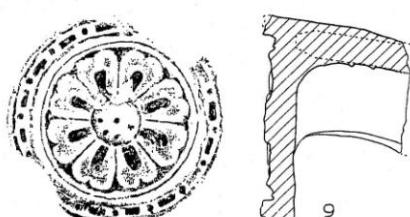
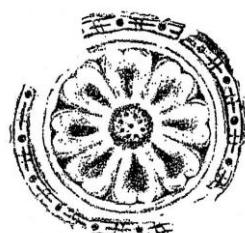
北白川廃寺の山田寺亞式瓦を焼いた窯跡は、岩倉盆地のケシ山窯跡（右上図）と御用谷（ごよんだに）窯跡（右下図）で確認されている。岩倉盆地の瓦生産は、もともと北野廃寺（北区）の創建瓦を焼いた幡枝（はたえだ）元稻荷窯跡（左京区）を契機に開始されたものであり、北野廃寺は新羅使が推古31年（623）にもたらした仏像を納めた「葛野秦寺」

と考えられることから、「山田寺亞式」は秦氏との関係が深い軒丸瓦といえる〔菱田2002〕。

新羅使は仏像以外に、舍利・金塔・灌頂幡（かんじょうばん）等ももたらしており、これらは四天王寺（大阪市）に納められた。

■北野廃寺 (葛野秦寺)

北野廃寺は7世紀前半に建立された北山背最古の寺院。飛鳥寺創建に当たった瓦制作工人集団の一つ、通称「花組」の系譜を引く瓦が出土しており、蘇我氏との関係が深かったようである。次いで第二段階では、山田寺亞式瓦が見られる。上図のように、周縁の三重圈線のう



ち中央のものが、珠点と線を交互に配する一点鎖線状になっている。デザインが北白川廃寺と少し異なるが、珠点は残る。生産地は不明だが、幡枝地域の可能性が高いとされる。

山背の秦氏と言えば広隆寺（右京区）であるが、広隆寺では山田寺亜式瓦は出土しておらず、多くの氏族から形成される秦氏にあって、特定の有力な一派がこのデザインを採用したのであろうか。

丹波・但馬の「山田寺亜式」軒丸瓦

■和久寺跡

— 秦氏、関連寺院か

「山田寺亜式」軒丸瓦は、山陰道や加古川沿いの交通路周辺の古代寺院に見られ、山陰道沿いでは秦氏との関連が指摘されている〔菱田2013〕。

山陰道で言えるのであれば、加古川流域においても秦氏、あるいは渡来系氏族と関連する可能性を視野に置かなければならない。

和久（わく）寺跡（福知山市和久寺）は由良川中流の左岸、JR福知山駅から西へ1.5km位に位置し、鹿嶋神社境内には塔心礎が残る。圃場整理による発掘調査により、塔跡・金堂の一部・僧坊跡・回廊跡・工房跡・築地跡などが確認されている〔大槻1987〕。

多くの瓦が出土しており、その中で「WMO2系（単弁八葉蓮華文軒丸瓦）」と名付けられたものが山田寺亜式軒丸瓦になる。上図のように、周縁の文様が、珠点と珠点の間に4本の縦棒（輻線文）を配する独特な文様構成をもっている。

和久寺跡は、菱田氏によれば、『広隆寺末寺帳』に記載される江林寺（丹波国天田郡）に該当する可能性が高いとされる〔菱田2002〕。この江林寺の建立者は「秦長全」という人物であった。末寺という表現は後代のものであろうが、秦氏が関わる寺院であったようである。

大槻氏は、丹波国天田郡和久郷に関連する人名に和久勝（わくのすぐり）を挙げられている。勝姓をもつ氏族は、秦氏の同族と考えられている。和久寺跡の南には天田郡家推定地の半田（はんだ）遺跡があり、秦（ハタ）を半田と表記した可能性がある。同様の例に、『広隆寺末寺帳』に記される和泉秦寺は、貝塚市半田（はんだ）に所在する。



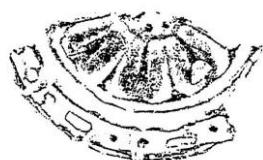
■立脇廃寺・釣坂遺跡（朝来市立脇）

— 赤染部（秦氏同族）の居住地 —

立脇（たちわき）廃寺は、和久寺跡から山陰道（=国道9号線）を西進し、和田山で国道312号線に入り、円山川沿いを10kmばかり南へ。途中、船宮（ふねのみや）古墳（前方後円墳 全長約80m）が道路脇にある。JR播但線ならば新井（にい）駅下車。律令制下の但馬国朝来（あさご）郡。立脇から南へ生野（いくの）峠を越えると市川流域。生野は、現在の行政区画では但馬になるが、『播磨国風土記』では播磨国神前郡になる。和久寺跡から国道429号線で生野まで走ると、地図上では近くみえるが、ものすごい悪路。

立脇集落の大通院境内に覆屋が作られ、塔心礎が安置されている。発掘調査はされていないが、周辺で瓦が収集されており、寺院が存在したことは疑問の余地がないとされる〔田畠1995〕。

立脇廃寺の北に接する釣坂（つりざか）遺跡では、瓦・木簡・木製祭祀具・多量の墨書き土器（「郷長」など）が出土している。



ここでは両者の瓦を同一に扱う（上図 釣坂遺跡）。

「周縁は二重圓文で、圓線と圓線との間に二個の珠文と矩形文を八单位配する、特徴的な文様をもつ。内区と外区は圓線を二重にめぐらして区画する」と記される〔前岡2007〕。

赤染部大野 — 秦氏の同族

立脇廃寺の造寺集団はむろん分からぬが、朝来郡で名前が分かる人物に赤染部大野がいる（右図）。「東大寺奴婢帳」として知られる一連の文書類の中に、但馬から東大寺に貢進された5人の奴婢関連文書があり、天平勝宝二年（750）の「但馬国司解文（上申文）」には

「右、朝来郡桑市郷戸主赤染部大野之婢」とあり、染色・鉱山関連に從事した秦氏同族の、赤染部の居住が確認できる（注1）。赤染氏は豊前の香春が有名だが、平城京・因幡・河内・遠江でも知られる（注2）。

桑市（くわいち）は今も残る地名で、養蚕・機織品生産と関連する可能性が考えられる。

赤染部得麻呂 — 但馬国府出土木簡

但馬国分寺跡からは多くの木簡が出土しており、施設の管理に関する人名を列記したものに



「北倉 赤染部得麻呂」

という人名が見られる〔日高町2002〕。赤染部得麻呂の居住地は分からぬが、赤染部大野とは同族であり、立脇廃寺の建立に秦氏の同族である赤染部が関わったとの推測は許されるであろう。

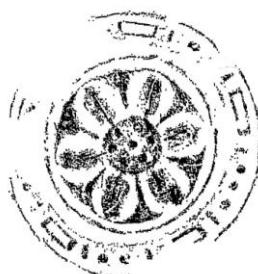
■三宅廃寺（豊岡市三宅字塔屋敷）

— 秦部氏が造立を主導したか？ —

三宅廃寺には、和田山から立脇廃寺とは逆方向に円山川右岸の県道2号線を北方（下流）に走り、出石（いずし）へ向かう。天日槍（あめのひほこ）を祭る出石神社の前から山名氏宗家の居城・此隅（このすみ）山城を越え、袴狭（はかざ）遺跡を抜け、円山川の支流・穴見川沿いの三宅集落へ。慈等寺の下方斜面が三宅廃寺跡で、寺跡山側の三宅瓦窯は保存・公開されている。近隣に式内・大王生部兵主（おおみぶべひょうす）神社、式内・中嶋神社が鎮座する。律令制下の但馬国出石郡。

1998年、下水道工事で瓦積基壇が検出され、転落した礎石、塔の相輪部材である九輪（覆輪）や伏鉢の一部、鷁尾片などが出土している。

軒丸瓦は2種類確認され、きわめて特徴ある。1種は讃岐地方の系譜を引き、もう1種は「山田寺亞式」である（右図）。山背・但馬・讃岐と広範囲なネットワークをもつ集団と言えば、これだけでも秦氏の存在が予想される。

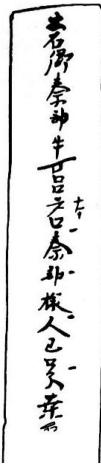


周縁の文様は立脇廃寺（釣坂遺跡）と同工異曲であるが、花弁の枚数が八葉から六葉になっており、デザインの変容が目立つ〔潮崎2001〕。

袴狭遺跡（豊岡市出石町）

三宅廃寺と至近距離にある袴狭遺跡は、第1次但馬国府、あるいは出石郡家と関連する遺跡と推定されており、木簡・墨書土器が多く出土した。

木簡には（右図）、
「出石郷秦部牛万呂戸口秦部旅人」
「秦部大山 秦部弟麻呂 秦部口山」
など。墨書土器では、
秦安・秦戌・秦磐・秦淨・秦内
など秦氏関連の人名がみられる〔小寺
1995、兵庫県教委2000〕。
秦部が三宅廃寺の造立に関わった可能性は高い。



■殿岡（とのおか）廃寺（美方郡香美町村岡）

殿岡廃寺の所在する香美町（かみちょう）村岡へは、和田山から国道9号線をさらに北西へ走る。但馬トンネルを抜けた湯舟川上流の福岡から寺河内一帯が古代七美（しづみ）郡の政治的中心地であった。

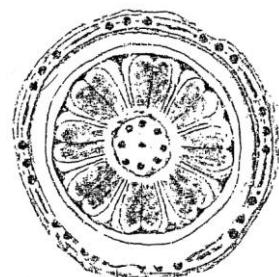


大型円墳の長者ヶ平（ちょうじゃがなる）1号墳、豪華な金銅製装飾大刀2本や金銅製馬具が出土した文堂（ぶんどう）古墳、ハス（蓮華）を描いた石材が収拾された大型方墳の長者ヶ平2号墳（上図）など3基の首長墓が築造されている。

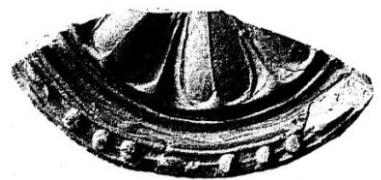
周辺には、騎馬像の線刻壁画が残る古墳、竪穴系横口式石室や三角持送り式天井の石室をもつ古墳などが存在し、渡来文化が色濃い。

殿岡廃寺は瓦が多量に採集されているのみで〔谷本2001〕、現在のところ実態不明である。

但馬で出土する「山田寺
亞式」瓦のうち、殿岡廃寺
出土例（右図）は、北白川
廃寺例に最も近いと指摘さ
れている。北白川廃寺→殿
岡廃寺→立脇廃寺（釣坂
遺跡）→三宅廃寺例と文様の
簡略化が進んでいる。



山陰道沿い出土例の
うち最も西に位置する
地にいち早く伝わって
おり、寺院建立集団の
ネットワークは在地を越え、極めて広範囲にわたって形成された実態が裏付けられる。



播磨の「山田寺亞式」軒丸瓦

播磨では加古川流域に「山田寺亞式」軒丸瓦が集中的に見られる。河合廃寺・殿原廃寺（賀毛郡）、中西廃寺（印南郡）、西条廃寺・野口廃寺（賀古郡）の5ヶ所である。加古川と由良川は日本で一番低い分水界（95.4m）でつながっており、交流は容易であった。

播磨の「山田寺亞式」軒丸瓦を紹介するページ
がなくなったので、将来、再度同じテーマを取り
上げたい。

注

(1) [前岡2006] p.84に「但馬国司解」の写真図版が掲載されており、字は小さいが読める。

(2)『続日本紀』宝亀八年(777)四月条

「右京の人從六位上赤染国持ら四人、河内国大県郡の人正六位上赤染人足ら十三人、遠江国蓬原郡の人外從八位下赤染長濱、因幡国八上郡の人外從六位下赤染帶繩ら十九人に姓を常世連と賜ふ」

河内国大県郡(現八尾市神宮寺)には、式内社の常世岐姫(とこよぎひめ)神社が鎮座する。

参考・引用文献

小寺誠 1995『袴狭遺跡内田地区発掘調査概報 袴狭

遺跡周辺官衙関係遺跡の調査』出石町教育委員会
大槻真純 1987「和久寺の瓦」『京都府埋蔵文化財論

集』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター

潮崎誠 2001「三宅寺と瓦窯跡」『北近畿の考古学』
両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
立花聰・菱田哲郎 1985「殿原廃寺跡」『兵庫県埋蔵

文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県文化協会

田畠基 1995「朝来町立脇地区の歴史時代遺跡群」

『歴史と神戸』192 神戸史学会

田畠基 2001「立脇廃寺・釣坂遺跡」

谷本進 2001「殿岡廃寺」『北近畿の考古学』

両丹考古学研究会・但馬考古学研究会

菱田哲郎 2002「秦氏の寺とそのネットワーク」

『京都と京街道 京都・丹波・丹後』吉川弘文館

菱田哲郎 2005「山背の山田寺式軒瓦」

『古代瓦研究Ⅱ』古代瓦研究会 奈良文化財研究所

菱田哲郎 2013「古代寺院と地域社会～交通機能を中心～」『古代寺院と律令体制下の京都府～なぜ

そこに寺はあるのか～』京都府埋蔵文化財研究会

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000

『出石郡出石町 袴狭遺跡』兵庫県教育委員会

日高町教育委員会 2002『但馬国府と但馬国分寺』

兵庫県城崎郡日高町

堀大輔 2010『飛鳥白鳳の甍～京都市の古代寺院～』

京都市文化財保護課

前岡孝彰 2006図録『国府・国分寺の謎を探る』

豊岡市教育委員会 但馬国府・国分寺館

前岡孝彰 2007「但馬の古代寺院とその軒瓦」

『考古学論究一小笠原好彦先生退任記念論集一』

村岡町誌編纂委員会『村岡町誌』上巻 村岡町 1980

播磨

* 河合廃寺

田岡香逸・高井悌三郎・藤澤一夫 1958

「播磨国河合廃寺」『史迹と美術』287

井内潔 1971「播磨古瓦資料1 河合廃寺」

『井内古文化研究室報』六 井内古文化研究室

* 殿原廃寺

「殿原廃寺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県文化協会 1985年

森幸三 1993『殿原廃寺(第4次)一市立泉小学校

改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』

兵庫県加西市教育委員会

* 中西廃寺

島田清 1934「播磨国中西廃寺跡の研究」

『史迹と美術』第43号

* 西条廃寺

井内潔 1971「播磨の古瓦資料Ⅱ 西条廃寺」

『井内古文化研究室報』八 井内古文化研究室

『西条廃寺—発掘調査報告書—』

加古川市教育委員会 1984年

西口和彦他 1985『西条廃寺発掘調査報告書』

加古川市教育委員会

宮本佳典他 1994『よみがえる伽藍～西条廃寺と播磨の古代寺院～』加古川総合文化センター

* 野口廃寺

井内潔 1975「播磨の古瓦資料Ⅲ 野口廃寺」

『井内古文化研究室報十三』井内古文化研究室

『野口廃寺 発掘調査概要報告書』

加古川市教育委員会 2004年

西川英樹 2009「野口廃寺出土瓦に関する若干の考

察」『考古学の視点 兵庫発信の考古学』

間壁葭子先生喜寿記念論文集刊行会

鎌谷木三次 1942『播磨上代寺院跡の研究』成武堂

『古代寺院からみた播磨』

播磨考古学研究集会記録集 2003年

『加西市史』

『加古川市史』

『兵庫県史』